

## 鎖骨下動脈病変に対するステント留置術

望月洋一<sup>1</sup>、赤路和則<sup>1</sup>、片野雄大<sup>2</sup>、木村浩晃<sup>3</sup>、志藤里香<sup>1</sup>、神澤孝夫<sup>2</sup>、谷崎義生<sup>1</sup>、美原盤<sup>3</sup>

1 脳血管研究所 美原記念病院 脳神経外科

2 脳血管研究所 美原記念病院 脳卒中部門

3 脳血管研究所 美原記念病院 神経内科

### 【はじめに】

鎖骨下動脈狭窄または閉塞に対する治療は血管内治療が第一選択とされている。直達手術よりも血管内治療は侵襲が小さく、合併症も少ないことがその理由であり、当院でも血管内治療を第一選択に行っている。当院での鎖骨下動脈病変に対する治療をまとめ、報告する。

### 【方法】

2001年2月から2015年7月に血管内治療を行った鎖骨下動脈狭窄症および閉塞症10例を対象に患者背景および治療方法、治療結果を検討した。

### 【結果】

平均年齢71.5歳(52-84歳)で男性9例、女性1例であった。病変はすべて左であり、狭窄が6例、閉塞が4例、症候性が5例であり、上肢のしびれ、失神が主であった。Approachは経上腕が5例、経大腿が5例であった。8例で治療に成功し、使用したステントの種類は、Palmaz stent5例、Palmaz Genesis stent2例、Express vascular LD1例であった。閉塞例のうち2例はlesion cross困難なため治療を完遂できなかった。そのうち1例は血管解離を生じたが無症状であった。その他に合併症を認めなかった。術後strokeはなかった。再狭窄を1例に認め、PTAを行った。

### 【結語】

鎖骨下動脈病変に対するステント留置術について報告した。lesion cross困難な症例もあったが、鎖骨下動脈ステント留置術は有用であった。